物處があつた。

×××××は、××した×××××から成立つてゐた、一班十二人、三班が一小隊、三小隊が一支隊、四支隊が一大隊、大隊が幾つか集つて總體になる。そして總體は糾察委員會を持つ。――糾察委員會は、大會から選出されたもの六人、軍事委員會から選出されたもの一人、その七人が構成委員でそれには三人の常務委員を置いて執行機關とした。

この尨大な組織は何をしたか？――

××は、毎週、火木土の三日間十二時から午後四時まで召集されて、一切の議案を討議した。法政局は毎日午後三時から常務會議を開いた。罷工委員會は、毎週一回、各機關部の代表を召集して聯席會議を開き、經過報告や、帝國主義反對のための諸事項を討議した。勞働者裁判所は判事五人、各方面から廻はして來る犯人を審判し、二十四時間内にプロレタリア的法の執行を行つた。財政委員會は毎週一回開かれ、それを直屬する會計と書記とが、數人の事務員と共に、代表大會の收支の數目を毎日算盤で彈いた。糾察隊は、總部から供給された銃砲やピストルを擔ぎ、ヘルメットや竹笠を被りながら、毎日隊伍を組んで荷揚場、碼頭、水上、商館、稅關、鐵道、その他目拔きの場所で犯人の檢束に力めた。その××の主なる事は、秩序の維持、食糧品の差押へ、ブルジョアの走狗を×へること、勞働者の裏切者を×へること。英國の物貨を××へること、ホンコン、アモイと沙面の××を××するその五つの×であつた。それから、罷工委員會と廣東四商會の聯合形態で、工商檢驗貨物處が組織された。これ

はストライキ勞働者が、事實上、稅關を占領したことになるのである。

この大きな××の××の爲めに、どんな費用が誰によつて負擔されたか、このことは支那の××上に看過し得ない原動力として何人もが好奇心の目を睜るところである。沙面事件の起つた當時、國民黨と罷工委員會とは、直ちに××の××××××××にアツピールを送ると、莫大な×××が南洋の華僑から到着した。英國から一萬五千元、米國から五萬元、フイリツピンから四萬一千元、シヤムから六萬七千元、ジヤバから六萬一千元、泗水から三萬五千元、バタビヤから五萬元――といふ風に五十萬元からの巨大な額が本國へ××された。それに國内の諸團體が續々と寄附金を送る。歷史の表面に現はれただけでも、×××××××××××と××××××××から、約二十三萬元の寄附があつた。

今、この×××××××の大軍の步哨兵であるところの、一小隊が、舊廣舞臺の横丁を長堤の大通へ切れ込まうとしてゐた。三十六人の武裝した勞働者憲兵を率ゐた小隊長は、沙面中國人組合の書記から榮轉した長定奎青年であつた。

この一小隊は、炎熱の廣東に、妙な聯想からきはめて喉の渴く任務に就いてゐた。彼等はその朝の委員會の指令によつて士敏土廠側に碇泊した民船に、ホンコンからのウヰスキーが滿載されてゐるといふ報告に基いて、糾察隊の任務を果すべく活動を開始したところであつた。英國製と否とに拘らず、酒類を差押へる役割は、差押へようとする當人達の心理狀態に何かの影響を與へないわけはない。若い小隊長は、カルト・ブランシュで受取つたこの命令の、最も魅惑的部分をその部下に匂はせてしまつたので

ある。事實上、喉の渇く太陽の下で、重い鐵砲を擔ぎながら進行して來た三十七人の勞働者は、各自の任務以上に、その民船拿捕の結果手に入るべき貨物の内容に就て想像力を煽られてゐたのであつた。

一小隊の糾察隊は、長堤を練つて行くものもの、しい葬列とT字形に行きあたつたのである。

時代錯誤的な、青い眼をした、赤い龍が、銅箔の箏をはね上げながらうねうねと群集の頭上を匍匐して行く。次には、乾した無花果のやうな乞食の子供達が葬儀會社の揃ひの服だけを、鍍金のやうにひらめかせながら、今にも行き倒れそうな足取りで、古めかしい佛具を捧げて行く。無意味な旗がつゞく、旗の下には、めちやくちやに汗を流した乞食共が大口開いて泣くやうに笑つて行く。それから、白い天幕を大事に押し立てゝ行く喪主達の行列がある。黄包車に乘つた女、自動車に腐つた野菜物のやうに汗みづくになつて塊り合つて行く一家族、葉卷をだらりと啣へて行く商人らしい紳士、聞えよがしに大聲で泣きながら、涙一つ滾さぬ婆さん、それらは四隅を勞働者によつて揭げられた白い幕の内側に、激昂した廣東市民とは關係のない古い支那の幽靈のやうに腹立たしいテンポを以て、何處かへ一日がゝりの行列を曳いて行くのである。

行列の向うには珠江が流れてゐて、總部の直轄下にあるライターが青天白日旗を飜へして三十七人の糾察隊を待つてゐた。狡猾な民船に乘つた買辨達は、そのライターに氣付かぬわけはない。秘かに何處かの岸へ陸揚してあとは貨物自動車で河南の八百八街の何處かへ紛れ込んだなら、それだけ罷工大會の軍備金の取立てが缺乏するわけである。——長定奎は汗を拭きながら、心のうちでその馬鹿げた葬式を

呪つた。

『これは、いつたい、誰の葬式かね？』

と、横丁に立話をしてゐる女達に訊ねた時には、長の片手は腰のピストルの柄を握つてゐた。尤もこの腹立たしげな表情に出る迄に、三十七人はものゝ三十分もそこに立待ちしてゐたのである。

『誰かね——なんでも、ホンコンから來た葬式ださうだ。』

『よほどな金持ちださうですよ。』

『わたしは、さつきから、樂隊が通るのを見かけてゐるんだが、今とほるのは支那の樂隊だ。』

かういふ噂を耳にしながら、小隊の中でも氣の早い四五人は、列から離れて、手眞似で小隊長に、行列を遮斷しようぢやないかと薦めるのであつた。

長定奎は、碼頭に繋がれてゐるライターのことを考へた。對岸にうろついてゐるウイスキーやジンを滿載した怪しい船のことを考へた。そして、その刹那的な焦躁の途中に、この若い小隊長は急に喉の渇くのを感じたのである。

『よし、行け！』

かういつて、彼はヘルメツト帽の廂を衝動的に動かすと一發の銃聲を石疊に反射させた。

比較的訓練されたこの一小隊は足並み早く葬列をめがけて突進した。

すると、こゝに最も不思議な現象が、三十七人の前に突變的に展開されたのである。

十六人の棺昇ぎによつて運ばれてゐた、古代の王様の靈柩のやうな、でこでこに飾られた棺が彼等の前に、ぴたりと停ると、喪服をつけた五六人の紳士が直ぐ手前の白幕から逆戻りして來て、手に手にピストルを翳しながら、糾察隊に蒼い顏をして對陣したのであつた。

『隊長、怪しいぞ！』

『こりや、只の葬式ぢやない！』

『一應、止めて調べたらどうですか？』

すべての印象が、その葬式に取つては不利であつた。長定奎は、聲を張り上げて、ピストルを頭上にひらめかせた。

『この葬式、待て！——われわれは省港罷工工人代表大會に屬する糾察隊だ。一應取調べる。』

五六人の紳士の一人が、それには答へずに、血眼になつて三十七人に向つて發砲した。勞働者憲兵の一人が、足を射拔かれて縛られた鶏のやうに仆れた。

その同僚の一人は、矢庭にモーゼル銃を構へて、射つた男を狙撃した。廣東クラブのボーイ長であつた陳景山は、脆くも胸板を射拔かれて柩の向う側に土嚢を墜としたやうに仆れた。

『反動だ！　おまへ達、手を擧げろ！』

長定奎は、何かの拍子にヘルメットを脱ぐと、尖つた聲で誰何した。やゝ不規則な隊伍に塊つた三十五人は、鐵砲やピストルを棚のやうにお互の肩越しに構へた。二哩に近い行列は楔を打たれた長い樹木

のやうに、中央を目がけて、後と先とが蹋み込むかに見えた。樂隊は、樂器だけを抱へて行列から離れてしまつた。彼等の奏する軍艦行進曲は、二發の銃聲を聽き止むべくあまりに高調子であつたのである。赤い旗と旗で聯絡を取つてゐた沖の帆船はぴたりと船脚を止めた。上空にプロペラーを鳴らしてゐた小さな飛行機は、コルク拔きのやうな旋回運動をやつて、近く近くと廣東の陽ぼてりのした都會面へ舞ひ下つた。機上には機關士と操縱士とが、飛行服に身を固めて、潛水眼鏡のやうなゴーグルの下から陸上の混亂を觀察した。その一人は、明らかに、王資平の第三夫人と云はれる女賊燕飛芳にちがひなかつた。

混亂に混亂を生んだ。もう二三發の銃彈が彼我の間に交はされた。見物人は雪崩れを打つて、銘々の店先や、門口や、横丁露地の奥へ逃げ込んだ。そして、この時若い長定奎は糾察隊員としては、寧ろ軍事的な機敏さをその行動に示してゐた。第一に、彼のマヌヴアーの最も時機を得たものは小隊の一人を置いて、彼等を傷けなかつたことである。次には狙撃の標的を抵抗するものゝ頭上はるかの場所にして軍法處へ電話をかけさせたことであつた。最後に、彼はその怪しげな金ぴかの柩を捕獲して、直ちにその錦の飾りを引き剝ぎ、重い自然木を刻り拔いた柩蓋をこぢ開けたことであつた。その間彼れの部下は、いさゝかなりと抵抗の意志を示したやうな葬列の一味を、容赦なく武裝解除してゐた。

黑塗りの柩は片身を削がれた鯨のやうに、白い中味を曝らけ出した。——中からは、巧みな換氣裝置を施した狹い空間に、長い間魔醉劑のほとぼりから醒めて悶えに悶え通した富豪王資平の、人質の隱れ

家へ送られる途中の浅ましい姿が躍り出た。衂血を流して、その邊を嘔吐で塗りこくり、拳や膝頭を血だらけにしたホンコン一二の大富豪か、墓から蘇つた死人のやうに烈しい日光に黒と白との凹凸を見せてゐる長堤の大通りをぼんやり見据ゑながら、起き上つては轉がり、轉がつては柩の縁に船暈に惱むやうに凭れかゝつた。

『君は、誰か？――』

王資平は、しばらく人間の言葉に不感性になつたやうに、この質問に對して、白い眼を睜るだけだつた。やゝあつて彼は長定奎の引金に指をかけたピストルに、その視線を轉じた。

『ここは、いつたい、何處なのか？　わしはホンコンには居ないのか？　わしの名は王資平だ。燕飛芳は何處にゐる？……』

この時、部下の一人が、小隊長の傍らへ立つた。

『小隊長、あの一人が自白するところによれば、これは雲南軍系の殘黨の陰謀團らしいのです。恐らく、この男を人質にして、大金をでもせしめようとする誘拐團の一味なのでせう。――只今、本部の方からは、一大隊の糾察隊が至急こちらへ特派されるそうです。』

『ははあ、さういふことなら、尙更、この男は檢擧してやる必要がある。事件の發展によつて、こりあ、我々一小隊がウイスキーよりも大物を捕つたことになるぜ！』

このドラマを、大部分は無智と放心から、口を開けて見戍つてゐた棺舁きや、泣き男、泣き女の一群

があつた。それから、障碍物がなくなると流れて來る殘滓のやうな群集も、この光景を取巻き始めた。

そしてその中から、最も熱心な目擊者の一人であつた、汚ならしい苦力に扮した李刀達が、抑へきれぬ昂奮から、突然幕を上げさせる登場人物のやうに舊友長定奎の前へ歩み出た。

『長君。この人攫ひ團の內幕は僕がよく知つてるよ！』

『おお、李刀達か？　――どうして、今、君は、また廣東へ歸つて來てゐるのか？』

『譯はあとから話す。――あの飛行機に氣を付けろよ！　ひよつとしたら、あの女め、爆彈でも投下しあしないかと、それが心配だ。――あすこに停つてゐる帆船、あれには軍閥の古手が五六十人の暴力團を率ゐて乘つてるだけだ。おれは、大きい聲ぢや云へないが、ホンコンの王英先生の呟咐で、こいつ等一行を尾行して來たんだ！』

かう云つて指した空の上には獲物を見付けてきりきり舞ひをしてゐるやうな、さいぜんの飛行機は、俄かに方向を轉換すると、けたたましい唸りを擧げて、はるかに河南の方へ、蜻蛉の翼を伸ばしたやうに逃げ延びるのであつた。

『畜生、あの女賊めを捕りそこなつた！――この野郎があいつ等の五千萬弗の强嚇の身の代さ！　見ろ、金持ちといふ奴は、かういふたはいもない馬鹿なのかな！……』

李刀達の煤黑くなつた顏から、眼を柩の中の富豪に轉ずると、長定奎は、長いこんぐらがつた絲の兩端を、始めて發見した人間のやうな表情でかう訊ねた。

『すると、奴等は、また廣東政府を乗取るつもりでてもあつたかな？……』

李刀達は、樂器を鳴らすやうに兩手を敲き合せた。

『雲南軍系の古手が、やはりホンコンで英國人に匿まはれてゐたのだよ。そいつ等と、南軍の殘黨どもが、しきりに通謀しては、我々の新らしい民衆運動に妨害しようとしてゐあがつたんだ！――いけ圖々しい奴等さ！』

23

李刀達は、自分の方へ飛んで來る蹴鞠をどうしても、蹴かへさずには居られない學童のやうな焦躁を感じた。ただ、この場合、蹴かへすべき當の對手は、監禁されてゐる、人間の百萬長者であつた。彼は、いけぞんざいに詰つた。

『阿片？――べらぼうめ、俺に阿片なんかあるもんか！　今どき、廣東で阿片なんぞ嚥んでる奴は、反動か、ブルジョアだよ。――さつさと食つたら、そこへころがつて寢るんだ！』

彼は、取り縋がる王資平を邪慳に拂ひ退けながら、たゞ一つのテーブルの上へ、飯と一品の料理とを置いた。

王資平は、しばらく兩手で輪を描くやうに空中にもがいてゐたが、扉を閉めきつて李刀達が去らうとするのを見てとると、いきなり飛びかかつて肩の上へ咬みつくやうに囁いた。

『……金は、金ならいくらでも出す。……わ、わしは、阿片がないと死んでしまふんだ、お前、助けると思つて一服惠んでくれ！　こ、この通りだ！』

李刀達は、高い所から見下すやうに、その底光りのする、獸のやうに黃色い瞳と、蔭つぽい兩頰の肉と、わなわなと震へる唇と、まばらな顏の半分に植つた粗髯とを見返へした。これが、ホンコン有數の富豪なのだ、彼れの輕蔑には憎みが混つてゐた。

『阿片を嚥まないで死ぬほど中毒してゐるなら、誰も止めはしない。勝手に死ぬなりどうなりするがいや。――放してくれ、俺は用のあるからだだ。』

だが、人間の病的な衝動は、李刀達が放言したほど淡泊なものではなかつた。次ぎの瞬間、彼は、猛然として檻の破目を發見した野獸のやうに、自分を押しのけ、飛び越え、蹂躙し、咬み殺しても室外へ出ようとする阿片中毒患者の狂暴襲擊に、手と云ひ足腰と云はず、鐵のピンサアで摑み立てられてゐる自分を見なければならなかつた。襲擊者の眼は、廊下の薄明りに、狼のやうに、それだけが光つた。それは死と格闘してゐる眼であつた。深刻な怖れが、番人の全身を襲つた。

一枚の扉の把手を中心に、青年と老人とは、二匹の猛獸のやうに、單純な、殆んど狂暴さのための狂暴をたがひに示し合ふやうな闘爭を開始した。襲ふ方は、無言である。李刀達は、何かしら相手の觀念に訴へようとする本能を持つてゐただけ、稍不利であつた。鐵の萬力のやうな二本の手が、最後に、彼れの咽喉首を四方八方から締めつけるやうに思へた。それは、決して二本の手、腕ではなくて、奇怪な

六本、八本、十人分の魔力のやうに思へた。彼はその力の壓搾の下に栗のやうに縮んでしまつた。無感覺のうちに、何をどうしたか知らないが、急にその力から自分が解き放されて、綿弓のやうな音を立てながら廊下の壁へうち當つてゐた。空氣は熱した液體のやうに、大きい音を立てて咽喉へ這入つた。彼は、口といふものの小ささを感じた。飛び出したやうな眼で、第二の襲撃を待ちながら、對手の方を見ると、意外にも、あれほど狂亂した王資平は、誰かに兩足をひつぱつて內側へ吸ひ込まれるやうに、扉へ片手を掛けながら、ずるずると自分で扉を締め切つてしまつた。その海藻のやうな顏は、たしかに癲者の斷末魔であつた。

『水だ！——』

彈き返へされるやうに廊下を走り出した、窓の下で、一つ曲ると、階段を下りようとするはずみに、彼はばつたり一人の老人に突き當つた。

『水だ、大變だ！』

『李刀達、慌てるに及ばん。王資平は、これからわしが放免してやるんぢや。』

何かの長い柄で、ぐいと片腕を搦へられたので、向き直つた彼は、窓の反對の下に背丈の高い、鷄のやうな風格の老人を振り仰いだ。何よりも老人の透き通つた聲と、貴族的な鼻と練り絹のやうな長髯とが、腦天から劍を打ち込まれたやうに、彼を萎縮させた。

『おツ、貴下は……？　大變です。富豪王資平は死んでしまひましたー』

『まあ、よい。――それも大事ないことぢや。これさへあれば、あの病人はすぐ蘇生するよ。』

老人は眼を細めてほくそ笑みながら、手にした銀製のパイプを、重みをはかるやうに持ち直して見せた。

『阿片の、これあ、又どうして？――』

これに答へる代りに、豫言者のやうな白衣の老人は、まだ李刀達の慌てた聲音の殘つてゐさうな廊下を、百萬長者の監禁してある室へと取つてかへした。本來この老人に對しては、宿命的に服從しなければならぬやうな自分を、今更李刀達は一種の神祕性をさへもつて考へねばならなかつた。

室内では、泡を吹いてうち仆れてゐる富豪の殘骸をやつとのことで、寢臺の上へ運ぶと、老人は、もの慣れた手つきで、テーブルの上へアルコールランプを點じ、銀の小函からパイプに移した藥脂をぢりぢりと燻し始めた。かすかな呼吸をしてゐた王資平は、やがてその銀のパイプから呼吸すべく、李刀達の指で齒と齒がこぢあけられた。

ぢりぢりと、蝦の焦げるやうな、阿片の燃える臭がした。見るかげもなく富豪の正體を剝ぎ去られた王資平は、深く唸るやうな吐息をした。

『よし、かうして置けばあとは自由だ。それから、この扉を開け放しにしておくがよからう。――』

老人は、かう云つて。もう一度寢臺の上をかへり見ながら先に立つた。

『先生、又妙な所でお目にかかりますな。――いつたい、貴方はどなたですか？　私は、貴下の仰せの

通り、ホンコンの王英先生のホテルへ參りますと、殆んど息をつく間もなく妙な事件にかかり合ひになりました、それやこれやで、私には何が何やらまるつきり迷宮の中を歩いてるやうなもんです。……先生、どうぞ、明して下さい！　私は、自分が何處にゐるかを知りたいんです。何のためにこんな事をしてゐるかを？』

階下へ出て、狹い壁の間から、賬かな、眞白い日覆ひに覆はれた、象牙細工の店や藥品店のある横町へ出る扉口まで行くと、李刀達は眼をしばたたきながら訊ねた。たしかに、二人は同じ家の別な入口へ出てしまつたのだ。始め長定奎と、もう一人の市黨部の役人と、三人で這入つて來た入口はそこではなかつた。門衛がゐて、暫く王資平を見戍つてゐる間、いろいろな事に李刀達の便宜を計つてくれる筈であつたのだ。昨日の事件以來、富豪王資平は廣東政府の珍客として、何かの調査が濟むまであの一室に監禁されて居つたのである。

『わしか、わしはお前の考へるほど不思議な人物でもないのぢや。――まあ、その邊まで歩いて行つて、ゆつくり話すとしよう。』

かう云つて、老人は長い髯を扱くと、音もなく大股に歩いた。

24

その老人の話によると、李刀達はたしかに、自分も無意識ながら、支那の解放運動に從事してゐたこ

とを悟つた。

彼にとつての、この驚くべき發見は、大東酒店の風通しのいいルーフ・ガーデンに棕梠の葉蔭の巧みにあんばいされた食卓の上で、吳友仁老人のゼスチュアの多い手によつて展開された。

『――での、あんたは、つまり、わしに囁かされたんぢやよ！　それがそもそもの事の始まりさ。――わしは、何といふのかの、謂はば何でも知つとる、老人ぢやよ。探偵、といふか、それとも洒落れてインタアナショナル何とか云ふか――それは御推察にまかせるが、たいがいの廣東ホンコンのことは、一度はわしの耳を通ることになつとる、と、云ふ立場に居る老人ぢやよ。

『あんたは、あの晩十八甫の人毛賣買業者の裏二階へお出でぢやつたろ。あそこは、何だと思はつしやるか？　表向き人間の髮の毛を賣買しとる――それは看板、實は南支那の最も惡辣な反動的軍閥の弗箱を勤める人攫ひ團の巢ぢやよ。あの二階な、わしが電氣仕掛でピストルが四方八方から覗いとると、あんたを囁かし申した、あの部屋はほんとは倉庫なのぢやが、ちよつとの間、わしが無理に借り受けたものぢや。畫は、あそこへ持つて行つて、書畫の展覽會を催したよ、夜は、その書畫を入れる唐櫃へ、わしらが歸つたあとでも、ちあんと重役連の秘密會議の會話が、梅蘭芳の歌詞のやうに、蓄音機のレコードになつてそのまま殘るといふ奴、アメリカ製の自働探偵機――デクタフオーンといふのが仕掛けてあつたのぢや。これこそ、ほんとに電氣仕掛よ。はツ、はツ、はあ――つまり、わしの方で睨むことがあつたわけさ。といふのは、この人攫ひ會社は、元來、馬、王、呂、湯、林、陳、五人の惡漢共が下仕事を

やり居るが、社長といふものが顏を見せない。いつも其奴は、「上海郵務管理局、私函第3號」ちう名で仕事の手配をさせるのぢや、――いろいろと上海方面をたぐりよせて見ると、電報はいつも上海で中繼ぎされて送られるよ。仲繼ぎ人を擧げて見ても、此奴泥を吐かぬ。まあ、そこが直感とでもいふかの、わしは上海からかけて、電報の利く大都會の、目星しい金持ちといふ金持ちをすつかり內偵して――やつと臭いなと思つたのは、その社長、ほら、お前さんが、つい今の今まで摑みあつて喧嘩し居つた王資平ぢやよ！　此奴は、表向き銀行家と名乘つちよるが、あんたも見て來た通り、あんな手廣い邸を三つも四つも抱へとる、關係筋の銀行を探れば、大した株主でもない、取引もほんの言ひ譯ばかり。そこで、わしも考へた――。

『一つ此奴の弱體からつけ入らうとな。人間、どんな鋼鐵の甲冑を着てゐても、どんなに宗教道德で氣持ちを固めても、元來が人間ぢや――動物ぢやよ。そこで、色情、な、これが十中の八九まではトランプさ。と云つたわけで、わしは、腕利きの女探偵をこの春から王資平の第三夫人といふことにして、入り込ましたのさ、純然たる細工だ。色仕掛けだ。當人、その方は達者なものだ。喜んで行つたよ、どこから見ても、あの通りの妖婦ぢやろ、惜しいもんだ。あれにほんとの戀が出來れば探偵なんぞはさせて置かんのぢやがのう。美しい、それこそ、これも何かの電氣仕掛けみたいな女よ！……でな、間もなく通牒があつた。によると、やはり、電報は王資平から出て居る。で、確證を得ると、わしは、五人の惡漢が親方を知らぬを幸ひ、一つ面白い芝居を打つて奴らを一網打盡に自滅させてしまはうと思つたのぢ

や。わしの方がどうかすると、よほど惡黨かもしれんて。――王資平の最後に打つた電報は、わしが南京蟲のやうに捻り殺したのぢや。そして、その代り五人の惡漢あてに、やはり同じ暗號で、五人を王資平に向はしたのぢや！

『……さあ、五人は躍起となつて、自分達の親方を誘拐しにかかつた、その手筈を、わしが壁一重の所から聽いとるといふ次第さ。こんないい氣持ちなものはない。王資平をやつつけるなら、きつと親方は共産黨だらう――などといふ意見も出をつたよ。まあ、わしはその黨には屬せぬが、ともかく現在の廣東政府には、何かのつながりで列席しちよる筈ぢや。さうかうしてゐるうちに、妖婦燕飛芳、即ちわしの女探偵、かの女と惡漢の一人の間に乙な提携が出來上つたわけよ。どうかして、王資平を、英國の官憲の手の屆かぬ場所へ誘き出さうといふのが、惡漢共と、こちらとぴつたりうまの合つた話さ。ただ、惡漢共は、それを自分の親方とは知らずに實行するといふ皮肉が、一つの景物ぢや。といふ矢先に、あの沙面事件！　ああいふ突發事件になると、われわれ天啓に乏しい動物ではどうとも出來んものぢや。世の中には、探偵出來得るものと出來んものとがある。世の中に竭す探偵の役割なんぞは、まあ、淺墓なもんぢやよ。――ところが、あの事件で、五人は急ぎ出した。こちらもそれをいいしほに、やれるところまではやつて見ようと燕飛芳へ傳へてやつた。恰度、そこへ、網にかかつたやうなのは、失禮ぢやが、李刀達さん、あんたぢやよ。わしらは、あのどさくさの最中にも、あのどさくさであればこそ、かなりこの廣東を見張つてゐたんぢや。その見張りのいい目星になつたのが、至極小說的な空想を抱いて

居られるあんたぢやつたのぢや！　ざつと、まあかい撮んで云へば、あんたがわしらの無意識な手先を勤めてくれたのはさういふ次第ぢや。

『あんたがホンコンへ立たれてからも、わしは英國の官憲が、どれほどあんたを知つとるかを調べに、妙な交換條件を持ち出して、それとなく內意を探ぐつたこともあるのぢや。いや、もう、この商賣は四方八方に氣を配らんと、一方だけの見方では、魚が網から洩れるでのう。それからあとの話は、大部分あんたの御經驗どほりぢや。ホンコンの王英先生といふのは、これもわしの同僚で、昔は孫文や黃興君などと、同じ中興會の仲間さ。さきほど、王英君から通信があつて、燕飛芳とあんた方の對決なぞ素晴しい芝居であつたと云つて來居るが、まあ、そのへんまで手の込んだ仕事をせんと、何せ先方は、大仕掛に三百五十人もの人數を驅り集めて出かけたんぢやから、發覺したら、奴等の道德として殺すのは慈善事業ぐらゐに考へとるからのう。眞劍だ。ただ、惜しいことには、張定奎君が少しやり過ぎて、帆船の梁鴻楷の手先を逃がしてしまつたことぢやよ。彼奴らは現在の廣東政府にとつても兎角の邪魔者なら、英國側の金で働く獅子身中の蟲ぢやよ。これだけは惜しかつた。――さうして、折詰にしてここまで運んで來さして置いて、さつきあんたが王を介抱しをつたらう、あすこへちやんと運び入れて、それから奴等を擧げるつもりぢやつた。ところが、ここに又探偵の仕事の淺墓な事實を證據立てる突發事件――あの糾察隊との衝突ぢやよ。もう、かう民衆運動が烈しくなつて來ると、わしらの仕事は小さな頭腦の中の計畫だけに終るも同然ぢや。しかし一面、張定奎君のおかげで、こちらはさほど警官を動員せ

ずとも濟んだわけぢや。それに、馬、陳の二人はわしらの手を經ずに死刑になつてしまつたといふ便宜もあつた。——そこで、わざわざホンコンから變裝してまで、王英君の云ひつけ通り、奴等を送り込みに來られたあんたの、終始一貫、多方面に亙つてかくも盡力して下された人攫ひ團事件は、人攫ひ團の關する範圍だけでは目覺ましい大團圓を結んだといふわけぢや。……そこでこの事件に、間接ではあつたが、最も功勞のあるあんたのために乾杯しませう！　乾杯に次いで、わしは、あんたをどういふ風に出世させて上げたらいいものか、それを篤と考へたいのぢや。——』

話の大部分に就いて眼を圓くしてゐた李刀達は、この時、むつくりと頸を擡げた。

『僕は、××××になりたいです！』

ここで、吳老人は、棕梠の葉を戰かすほど高く笑つた。

『稚氣、實に愛すべき人ぢやよ！』と云つて、彼は銀髯の間に一段と言葉を低めた。

『——したが、それは、階級意識の問題での。まあ、その方はその方で、調べるところではちやんと調べて居るだらうから、むしろむきになつて、掛らぬ方がよろしからうて。ともかく、わしは、あんたの階級的直感を、現在の省港罷工工人大會の幹部へ推薦して置かうよ！』

と云ひ終つて、吳友仁老人は、もう冷えきつた老酒のコップを、多能なしなやかな右手で、西洋人流に差し上げた。

25

いつの間にか、支那は、英國と戰爭を挑んでゐた。

世紀を通じて、この戰爭だけは、宣戰布告なしに開始された。

白手套に、燕尾服を着たブルジョア外交官の、社交舞踏會のはねのやうな形式的な入り替りと、婉曲に自國の非を掩ひ、敵對國の權利侵略か——その存在が、自國を一切の武斷的侵略にまで導いたのだ、といふ、それ自身に於て矛盾した宣戰布告の發布がなかつたと云つても、この珍らしい戰爭には、殆ど他のどんな戰爭にも見受けられぬやうな新鮮な偉大なものが閃めいた。

それは、世界一のブルジョアジーを誇る帝國主義者と、最尖最鋭に、始めて國際的に目覺めたプロレタリアートとの、決定的な戰爭であつたからだ。

そこに意義づけられる近代的特色は、プロレタリアート國は、ブルジョア帝國のやうに、巨億の軍費と、軍艦と植民地と軍隊と、最も科學的に敵國を震駭せしむる武器とを持たなくとも、猶よく一年半の戰鬪を持續し得るといふ、一つの戰法であつた。

支那は、然らば、×××英國に敵對したであらうか？

消極的戰鬪方法である！

單元的に、在來までの戰爭の持つ政治的意義を、經濟鬪爭から切り離して、經濟戰をもつて鬪ひ、し

かもなほ新しい政治的意義を贏ち取つたのである。――もう一言、別に、云ふと、それは、敵國の政治家が戰爭に與へるブルジョア・イデオロギーを剝ぎ取つて、プロレタリアの戰爭として、それと闘つたのである。――明かに、この消極的戰略には、積極的なものがあつた。尠くとも、敵の戰闘方法に非常な番狂はせと、口實のつけやうに困らしめた、一種のバルテイザン的戰爭が、この廣東の對英經濟絶交であつた。

英國が海軍と軍隊とを差遣しようが、そこには支那の群集がようよしてゐるだけである。そして、領土侵略の、いかに古めかしい戰爭であるかは、英國の海陸軍の首腦部は、歐洲大戰の苦がい經驗によつて良く知り盡くしてゐた。しかし、さうかと云つて、默認して置けば、これらの群集は、南京條約以來英領土となつたホンコンの利權を奪回し、東洋から英國の根據を根こそげ顚覆しようとするのだ。――

――×××？

海外への×××、アツピールによつて。經濟力の×××によつて。根强い排外思想の鼓吹によつて。半植民化されて來た群集の間に、一切の外國人は×××××であると×××ことによつて。支那に資本主義なし、たゞ在るのは海外輸出資本を中心としたブルジョアジーのみであると、群集を敎へ込むことによつて。これらの×××とアツピールとが、英國々内のプロレタリアートによつて支持されぬわけはない。どんな保守的な英國の政治家と雖も、他民族の階級闘爭への武力的參加の不利なことを認めぬわけには行かなかつた。

かうして、ずるずるべつたりの狀態で、半永久的な新しい戰爭が、支那と英國との間に闘ひ續けられたのである。

頭腦の非科學的な政治家は、思想を抑壓するために、あらゆる性急なクー・デー・ターを行つて、益々その思想の傳播に力めるのが常である。より多く屈伸性を持つた頭腦の政治家は、革命を鎭壓するに、反革命を以てする。更らに、もう少し進歩した政治家は、階級闘爭の常該目標を塗り變へることによつて、敵の階級闘爭の鋭鋒を轉化して、その曖昧な歸結に待つ。――廣東政府の挑戰に對して英國政治家の對策は、沙面やホンコンのジンゴイストの焦躁的な、侵略的な、數回の請願にもかかはらずに、實にこの最後の手段にあつたのである。それには、さういふ手段に出てなければならぬやうになつた紳士政治家達の傍らに、英國のプロレタリアートの意を迎へようとして隙を狙つてゐたほかの狡猾な紳士政治家達が、その内閣を何かの機會によつて斃さうと待つてゐたからである。……

かういふ戰爭狀態にあつた廣東は、單なる古い侵略主義的排外思想に熱中したモツブだけの都會ではなかつた。そこには、賑かな號外によつて敵艦隊の一擧一動を報告する戰爭氣分もなかつたし、敵の一兵卒が仆れるごとに米價を吊上げる投機業者もなかつた。戰爭は、全市が一致してプロレタリアートの組織の中に結合されなければ勝たないのであつた。附景氣や、凱旋門や、金モールの戰爭ではない。默默として、敵の經濟力の洪水を堰き止めようとする、治水策のやうな洪水避難民の戰爭であつた。どうして敵の武力侵略を招かぬ程度で、敵を怒らせ、弱め、そのモーラルを低下せしめるかに目標を置

く、緊張した日常闘爭の延長であつたのである。この新しい戰爭に參加した軍隊は、英國から見れば、單なる群集にしか過がなかつた。彼等は水母のやうなだらしない風をして、布の靴を穿き、大聲で飯を頰張りながら、だらしのない集會と、非立憲的な會議と、突發的な街頭事件に群集心理を發揮する、平凡な、蟲けらのやうな路傍の支那人に過ぎなかつたのである。――喇叭のない戰爭、傳單の戰爭、機關銃の響かぬ攻擊、泥棒のやうに掠奪する攻擊の方法、苦力のやうな政治家が苦力に對つて煽動するちぢむさい戰爭、――英國の紳士達は嗤つた。これが、戰爭であつて堪るもんか！

が、しかし、それは、苦力のやうな支那の大衆にとつては、由々しい戰爭であつたのだ。

彼等は、この有史以來の大戰爭に參加すべく全然新しい世界觀から鍛へ上げられて行つた。その新世界觀は彼等に單純な一つの眞理を注ぎこんだのである。それは、世界には、搾取する者と、搾取される者との二つの階級しか存在しないといふ、頗る古くさい事柄であつた。ごく古くさくはあつたが、もつともつと古くさい事を敎へられてゐた大衆にとつては、これは全然新しい世界觀であつた。その世界觀に應じて、大衆の持つてゐる新しい力の××××が講じられた。それは、××××の試みである。この不思議な組織は、新しい世界觀と照らし合せて見ると、凜として犯すべからざる鐵の制度であつた。凡ての決議に、大多數の人間が××した。大多數の人間は、油にまみれ、汗を流し、空腹な、さほど學問もない勞働者と農民であつて。貧しいこれらの階級が、目前に必要とした事柄を決議するには、ローマ法の知識や外國語の研究は必要とされなかつた。ローマ法の知識や外國語の研究に伴ふ、その××××

×××と富とは、彼等を妨げこそすれ何の利益にもならなかつた。さういふブルジョアジイに浸りきつた在來までの政治家は、次第に彼等から、そのブルジョアジイのために驅逐されて行つた。高尙な趣味と、貴族的な外飾と、必要のない事柄を非連關的に知つて居るといふだけの知識を誇つて、それらの旣成政治家と學者と官吏とは、教養のないモツブを輕蔑しながら、次第に彼等の陣營から高價な衣服の裾を拂つた。――民衆運動の單調さと、單純さと、その非知識的な貪慾の恢復であることに反感を催した彼等は、無統一な複雜性のために、アナーキスチツクな自由のために、××を合理化する天才主義のために、××を合理的に思はせるための經濟學のために、彼等は各自の利己心を連結して、國民黨右派の名によつて反革命的ブロツクを作つた。

勞働者と地方農民の大衆は、さういふインテリゲンツイアの高等政策とは無關係に、各自の××した××を擧げて、絶對に大會の意志に××して××した。組織に慣れるまでにはそこに多少の干犯もあり、過失もあつた。しかし、本來が彼等の間から生れた、×××××である。自分の階級を前後左右に發見する時に、あまりに甚だしい飛躍的な過失は犯し得ないのである。各部門は大會の規定した機關を通じて雜然としながらも、軌道を滑る惑星のやうに囘轉した。

一個月、二個月――かうして彼等の運動が進出して行く間に、ホンコンを經由しない汽船や河船の數が非常に殖えた。又二百五十艘しかない支那全體の船が俄かに噸數を增して行つた。それだけ英國の海運業の打擊を與へたのである。廣東政府は、前年よりも罷業を開始してから四千八百萬元の貿易が增し

たといふ表を掲げて、廣東地方の生産加工業の進行を報告した。中央銀行の紙幣は、全社會の支持を受けたゝめに、今までの地方政府の紙幣價値から一轉して、殆んど全國的價値をもつて光り出した。今までホンコンで行はれた、海産物、綿、石炭、雜貨、セメントなどの取引市場は、海を越して廣東へ移つた。國民黨は、この罷業を一楔機として、孫仲山の遺訓に基いた新國家の建て直しにまで見透しをつけた。黄埔軍官學校は、ロシアから歸つた蔣介石を校長として、赤衞軍的組織のもとに、在來までの傭兵や民軍のだらしない集團を、國民革命軍に改組した。今まで四十五の勞働團體しかなかつた廣東は、急激に百以上にも增して二十萬からの勞働者がこれを支持した。

これらの事柄は明かに英國人の認めない戰爭に對して戰爭を挑んだ支那人が勝つたことを物語る數字なのである。この無形の大戰爭が、ホンコンと廣東を戰線にして、靜かな灰色の大暴風雨がひたひたと地平線を壓迫して動いて來た最中、もう一つの、吳友仁の先見し得なかつたやうな事件が突發して、鮮かに革命支那は二つに分裂する最初の龜裂を見せたのである！　それは八月十九日の夜の廖仲愷の暗殺事件である。

私は、この小說を通じて、讀者にいろいろな人物の存在を報告した筈である。支那の革命が、われわれ日本人の考へるやうに單純でないことを知らしめるためにも、それらの實在的乃至は架空的人物の存在理由は動かすべからざることであつた。すべての小說の作家のやうに、私もこの小說の中に出沒する各種の人物の決定的な方向の暗示に對しては、ある程度までの責任を負はうと思ふのである。

そこで私は、廻轉椅子のスミルノフが、どういふ關係から、彼れの友廖仲愷の死を知つたかを述べる必要に迫られる。

その夜の情景はざつとこんな風であつた。——

夜になると、巨漢スミルノフは、廣東市の革命的方角に向いた、鸚鵡の頭のやうに擦り減つた、廻轉椅子の上を離れる習慣を持つてゐた。それは、椅子に必要がなかつたからではなくて、夥しい電燈の數を誇りながらも、さすがに夜の暗黑は、廣東の市街面から、大部分の彼れの觀察對境を奪ひ去つたからである。椅子を離れた彼は、夕飯を濟ますと、亞洲酒店の三階を陣取つてゐる、自分達の同志將校や、新聞記者、技師、事務員などと、何處の室何處の隅とはなしにいろいろな世間話に興ずるのであつた。支那人側の宴會でもあれば出るし、特別な名指しの訪問客でもあればその人間に會ふ。そしてどういふ形の痰壺に唾を吐いて居ようとも、彼れの唇の間には、いつも同じ大型のパイプが挾まれてゐた。

最近の廣東には、スミルノフには、一晝夜を二十四時間だけしやべり續けても話切れぬほどの話題があつたのである。——それらの無數のエピソードの發生は、主として廣東市民の間に旺溢する革命的情勢にあつたことはむろんである。その情勢をいろいろなエピソードに發見するには、別々な觀點を必要とはしなかつた。いつものスミルノフの體驗的な批判が、大部分の觀察の規準をなしてゐる。八月十九

日の夜、小男の廖仲愷はいつものやうに、大股に歩きながら、一人の不思議な老人を同伴してスミルノフに引き合せた。

『これは、同志ユーヂン・ウー君です。ウー君は、私達の間にはなくてならぬ物識りです。凡ゆる事を知つてゐる――犯罪學のエンサイクロペディア、未來の警視總監です。同志とは云ひましたが、ウー氏は實はわれわれの大先輩なのです。』

アメリカ仕込みの廖仲愷の英語は、スミルノフをしていつも自分のシカゴ時代を思はせるやうな、どこかひなびた活動的のものがあつた。それに反して、今紹介されつゝある白髯の老人は氣取つた外交官のやうな、圓滑な英國訛りを持つてゐた。三人は握手して、めいめいの椅子へ腰を下した。その晩は都合よく、スミルノフはその部屋で近着の『ブラウダ』の束の皺を伸してゐたところであつた。

『今、役所からお退けですか？』

スミルノフの問ひに對して、廖仲愷は、てかてかコスメテイツクを塗つた頭をふつた。

『いや、今夜はちよつと招待されてゐましてね。――これから、御覽の通り、宴會へ行くところです。どうです、私のタキシード姿は？　これでも、アタミでヨツフエ氏にお會ひした時は、自動車社會主義者と綽名された好男子ですよ！』

いつになく上機嫌な彼は、その東洋流にとゝのつた顏に、健康さうな血を漲らして、出來るだけ自分を諧謔的に取扱はうと努めるのであつた。見れば、いつもの大きい鞄がない。

『廖仲愷君はこれからある親しい若い、美しい、婦人同志の宅へテタ・タートに行かれるところです。それで、この老人が、途中まで護衛の役とは、人間老人にはなりたくないものですな。』

吳老人も、こんなことを云つて笑ひ興じた。

『それは危い、外の宴會なら兎もかく、さういふ種類の宴會はつとめて避けられた方がよくはありませんか？』スミルノフは眞顏でかう云つた。『――つまり、貴下の奧さんに暗殺されるかもしれない！』

と云つて彼は、河馬のやうに笑ひ出した。と、續いて、この間廖仲愷を財政廳へ訪問した歸るさの、不思議なものと城内の苦力達の行く酒場へ迷ひ込んで、いろいろな名前を支那語で呼び上げると、その都度苦力達の表情が變つた事を話して聞かせた。

『――で、どうして蔣介石といふ人物は、あんなに勞働者の間に味方がたいんでせう？　何か、かう憚るところのある人のやうに……？』

『さあ――』

廖仲愷は、時計の微妙なぜんまいのやうに、黑い瞳をまはした。スミルノフは、不意にこんな質問を出した自分を後悔した。苟しくも、表面では同志を裝うてゐる軍人に就いて、その同志らしく思はれる人から意見を聽取することは、それだけでも誤りであるに相違ない。答へは吳友仁老人によつて、より確定的にされた。

『どうも、私共中華國民は、未だに大部分の封建主義から解放されてゐないんです。いつも、三人の人

が集まると、そこに權力が生じます。わしは蔣氏を反動だとは思ひません。しかし、貴下を同志としてお話すれば、蔣氏は御覽の通り軍隊以外の政治部員をあまり好んで居りません。――動もすると、それを排斥するやうな。ぢやて、勢ひ貴下がたの勢力の、いや御免なさい、組織の力の行屆いてゐる廣東大衆にとりましては、寧ろ、軍部に於ける統率者としての力量や、市街戰のマヌヴアーなどに於ける彼を信頼するにしても、最近よく政治に干渉したがる彼を好まんのですよ。――實際わしの見ましたところでは、政治家としての彼は古い北方軍閥の亞流を出ないものですよ。』

かういふ國民黨内の個人的批判に就いては、支那語の解らないロシア人はただ好奇心そのものであることに止まる以外には能はなかつた。スミルノフは、やたらに煙草をふかして、その不潔な煙が煽風機によつて、對手の顏へ吹きかけられるのを目擊しただけである。さうしてゐるうちにも、廖仲愷は、急にそはそはし出して歸り支度になつた。

『急ぎますか？――』

『ええ、ちよつと、實は少し重大問題で會見する人があるので……』

吳老人は人の好ささうな諧謔を續けた。

『この老人がそろそろお邪魔になりかけたのですな？』

それに對して、廖仲愷は、癖としてちよつと吃りながら眞顏で打消した。

『重大問題で――ちよつと私でなくては解らん事柄なのでしてね。』

『よろしい、同志廖仲愷、行つてお出でなさい！　だが、この間忠告したこと、あれだけは忘れられんやうにね。』

ここで三人は、あとから考へると、必要以上の強い握手を交はした。吳老人は、それから約三十分も話し込んで歸つて行つた。

その三十五分過ぎぐらゐに、慌しくスミルノフの室の前の廊下が、誰かによつて踏み鳴らされる音と、衞兵の誰何する聲とが聞えた。ブハーリンの理論から眼を上げたスミルノフは、思はず新聞をテーブルの下へ押し退けて居つたのである。

扉口には吳友仁老人と、もう一人の若い支那人とが、二本の劒付鐵砲によつて胸へ十字を組まれながら、這入らうとしてあせつてゐる姿が眼についた。スミルノフは、衞兵に、通してもよろしいと命じた。

『廖――廖仲愷同志は、そ、其處の大通の角で暗殺されてゐます！　――早く、早くおいでなさい！』

沈着な老人の表情が、殆んど暴風雨の下を潛つて來た人のやうにかき亂れてゐた。

スミルノフは、老人の頭上の鎌と槌の紋章に眼をやつた。

『暗殺――』

彼は、自分の言葉を口からふさぐやうに拳をそこへ持つて行つた。思はずテーブルから轉がり落ちたパイプは、エボナイトの乾き加減でぱきりと二つに折れた。その上を、無雜作に踏んでスミルノフは廊下へ飛び出した。外の支那人二人も彼に續いた。

その夜は、暗く、生あたたかく、市街の間に珠江の呼吸苦しい水蒸氣が溜つてゐた。導かれて行つた町角には、三人の警官と十五六人の勞働者によつて、黒い花束のやうな輪を造られた死骸が、うつ伏せになつてゐた。

大きいロシア人が、群集を掻き分けて抱き起して見ると、貴公子のやうな顔立ちをした。英國紳士風な口髭の廖仲愷だつた。手足はすつかり冷え切つてゐる。背中からの貫通した彈丸らしいものによつて胸のホワイト・シヤツは熟した茘枝の果のやうな斑點で赤らんでゐた。

『同志廖仲愷！』

スミルノフは、思はずロシア語で叫んだ。誰も、その孤獨な言葉に應ずる者はなかつた。次ぎに、彼はきつと顔を上げて、取り圍んでゐる群集を疑はしげに睨めまはした。彼れの蒼い眼に映じたものは、抽象的なイデオロギイ『親愛』の表情としての、勞働者達の涙と悶絶するやうな手振りであつた。しまひに、スミルノフは、呉老人の同伴した便衣服の若い男を顧みた。

『これは誰です！』

から英語で訪ねると呉老人は、片手で空氣をきりながら、淡白に答へた。

『これは、御心配いりません、糺察隊支部長の李刀達といふ革命青年です！』

『よろしい、李刀達君！同志の死骸をかつげ！――この死は、他日、必らず酬いられるだらう！――』

スミルノフは、涙と共に命じた。

昭和七年八月廿三日印刷
昭和七年八月廿七日發行

日本小説文庫　一六三
支那
（定價　金貳拾五錢）

著作者　前田河廣一郎
發行者　東京市日本橋區通三丁目八番地　和田利彦
印刷者　東京市日本橋區通三丁目八番地　木呂子斗鬼次
印刷所　東京市本所區厩橋一丁目廿七番地　凸版印刷株式會社本所分工場

檢印

發行所　東京・日本橋・通三丁目七番　春陽堂
振替・東京一六一七番
電話日本橋五一・六四一・三七八八

日本小說文庫目錄

1 有憂華　菊池寛　定價經錢三五六
2 孤島の鬼　江戸川亂歩　三〇六
3 關ヶ原　直木三十五　三五六
4 闇に開く窓　里見弴　三五六
5 隱亡堀　國枝史郎　二五六
6 さんど笠　子母澤寛　二〇四
7 井原西鶴　武者小路實篤　一〇二
8 紅蝙蝠　前篇　長谷川伸　三〇六
9 紅蝙蝠　後篇　長谷川伸　三〇六
10 第二の巖窟　白井喬二　一五四
11 淀君　前篇　三上於菟吉　三五六
12 淀君　後篇　三上於菟吉　三五六
13 半七捕物帳　1　岡本綺堂　一〇二
14 半七捕物帳　2　岡本綺堂　一〇二
15 星旗樓秘聞　木村毅　二〇四
16 唐人お吉　十一谷義三郎　一五四
17 時の敗者　唐人お吉　十一谷義三郎　三〇六
18 砂繪呪縛　前篇　土師清二　三五六
19 砂繪呪縛　後篇　土師清二　三五六
20 青眉　前篇　久米正雄　三〇六
21 青眉　後篇　久米正雄　二五六
22 澤村田之助　前篇　矢田挿雲　三〇六
23 澤村田之助　後篇　矢田挿雲　三〇六
24 新選組物語　子母澤寛　一五四
25 陰默　江戸川亂歩　一〇二
26 愛人　前篇　細田民樹　三五六
27 愛人　後篇　細田民樹　三五六
28 錢形平次捕物控　野村胡堂　二五六
29 虹の歌　長田幹彦　三五六
30 右門捕物帖　1　佐々木味津三　二五六
31 右門捕物帖　2　佐々木味津三　二五六
32 右門捕物帖　3　佐々木味津三　二五六
33 沈鐘と佳人　白井喬二　一五四
34 笑の王國　佐々木邦　三〇六
35 銀河　前篇　加藤武雄　二五六
36 銀河　後篇　加藤武雄　二五六
37 仇討五十三次　佐々木味津三　二〇四
38 愛憎の彼方　前篇　中村武羅夫　三〇六
39 愛憎の彼方　後篇　中村武羅夫　三〇六
40 戀愛黑點　前篇　正木不如丘　三〇六
41 戀愛黑點　後篇　正木不如丘　二〇四
42 草に祈る　櫻井忠溫　一五四
43 女殺延命院　土師清二　三〇六
44 戸並長八郎　前篇　長谷川伸　三〇六
45 戸並長八郎　後篇　長谷川伸　三〇六
46 南國太平記　前篇　直木三十五　三五六
47 南國太平記　中篇　直木三十五　三五六
48 南國太平記　後篇　直木三十五　三五六
49 清水の次郎長　前篇　村松梢風　三〇六
50 清水の次郎長　後篇　村松梢風　二五六
51 蛭川博士　大下宇陀兒　三五六
52 盲目の目擊者　甲賀三郎　二五六
53 菊一文字　吉川英治　三五六
54 右門捕物帖　4　佐々木味津三　二五六

55 敵討雜記帳 前篇 直木 三十五 二五六
56 敵討雜記帳 後篇 直木 三十五 二〇四
57 蟲 江戸川亂歩 二〇四
58 蜘蛛男 江戸川亂歩 三五六
59 太陽と隣人と 前篇 十一谷義三郎 三〇六
60 太陽と隣人と 後篇 十一谷義三郎 三〇六
61 淺草紅團 川端康成 二〇四
62 人間飢饉 村松梢風 三〇六
63 祖國は何處へ 1 白井喬二 近刊
64 祖國は何處へ 2 白井喬二 近刊
65 祖國は何處へ 3 白井喬二 近刊
66 祖國は何處へ 4 白井喬二 近刊
67 祖國は何處へ 5 白井喬二 近刊
68 祖國は何處へ 6 白井喬二 近刊
69 祖國は何處へ 7 白井喬二 近刊
70 半七捕物帳 3 岡本綺堂 一〇二
71 半七捕物帳 4 岡本綺堂 一〇二
72 日本孃(ミスニツポン) 前篇 群司次郎正 二五六
73 日本孃(ミスニツポン) 後篇 群司次郎正 二五六
74 侍ニッポン 群司次郎正 二五六
75 西南戰爭 前篇 平山蘆江 三〇六
76 西南戰爭 後篇 平山蘆江 三〇六
77 旗本退屈男 前篇 佐々木味津三 二〇四
78 旗本退屈男 後篇 佐々木味津三 二〇四
79 唐人船 平山蘆江 三五六
80 英五郎ふたり 子母澤寛 二〇四
81 投げ節彌之 子母澤寛 二〇四
82 逃げる旗本 子母澤寛 二〇四

83 島原美少年錄 木村毅 二五六
84 半七捕物帳 5 岡本綺堂 一〇二
85 半七捕物帳 6 岡本綺堂 一〇二
86 黃金假面 江戸川亂歩 三〇六
87 一寸法師 江戸川亂歩 二五六
88 半七捕物帳 7 岡本綺堂 一〇二
89 半七捕物帳 8 岡本綺堂 一〇二
90 日輪 前篇 三上於菟吉 三〇六
91 日輪 後篇 三上於菟吉 三〇六
92 清河八郎 前篇 三上於菟吉 三五六
93 清河八郎 後篇 三上於菟吉 三五六
94 獵奇の果 江戸川亂歩 二五六
95 艶麗風土記 前篇 小島政二郎 二五六
96 艶麗風土記 後篇 小島政二郎 二五六
97 神風時雨組 佐々木味津三 三〇六
98 白鬼 三上於菟吉 三五六
99 忠臣藏八景 本山荻舟 一五四
100 一刀流物語 本山荻舟 一五四
101 諸國捕物帳 額田六福 三五六
102 愛すればこそ 谷崎潤一郎 二〇四
103 痴人の愛 谷崎潤一郎 三五六
104 珠壺 龍膽寺雄 一五四
105 掌の上の惡魔 龍膽寺雄 一五四
106 續右門捕物帖 1 佐々木美津三 二五六
107 續右門捕物帖 2 佐々木美津三 二五六
108 朱面組傳奇 前篇 下村悅夫 三五六
109 朱面組傳奇 後篇 下村悅夫 三五六
110 相馬大作 額田六福 二五六

111 沓掛時次郎 長谷川伸 二〇 四
112 喰の母 長谷川伸 二五 六
113 松平長七郎青春記 下村悦夫 近刊
114 風雲天満双紙 佐々木味津三 三五 六
115 綺堂讀物集1 岡本綺堂 二五 六
116 綺堂讀物集2 岡本綺堂 二五 六
117 綺堂讀物集3 岡本綺堂 二五 六
118 綺堂讀物集4 岡本綺堂 二五 六
119 綺堂讀物集5 岡本綺堂 二五 六
120 大地に立つ 前篇 野村愛正 二〇 四
121 大地に立つ 後篇 野村愛正 二〇 四
122 東洲齋寫樂 邦枝完二 二五 六
123 饗宴 前篇 加藤武雄 三〇 六
124 饗宴 後篇 加藤武雄 三〇 六
125 天草美少年錄 佐々木味津三 三五 六
126 心理試驗 江戸川亂歩 一五 四
127 煙幕 櫻井忠温 三五 六
128 東京行進曲 菊池寛 三〇 六
129 半七捕物帳9 岡本綺堂 一〇 二
130 半七捕物帳10 岡本綺堂 一〇 二
131 半七捕物帳11 岡本綺堂 一〇 二
132 いたづら小僧日記 佐々木邦 三〇 六
133 青春行狀記 前篇 直木三十五 三五 六
134 青春行狀記 後篇 直木三十五 三五 六
135 お傳地獄 鈴木泉三郎 二〇 四
136 恐怖の齒型 大下宇陀兒 三五 六
137 決鬪介添人 大下宇陀兒 二〇 四
138 殺人鬼 前篇 濱尾四郎 三〇 六

139 殺人鬼 後篇 濱尾四郎 三〇 六
140 江戸城心中 前篇 吉川英治 三〇 六
141 江戸城心中 後篇 吉川英治 三〇 六
142 かん〳〵蟲は唄ふ 吉川英治 二五 六
143 鳩笛を吹く女 吉屋信子 三〇 六
144 吉良家の人々 森田草平 近刊
145 接吻市場 前篇 邦枝完二 三〇 六
146 接吻市場 後篇 邦枝完二 三〇 六
147 女祕書 丸木砂土 二五 六
148 綠衣の聖母 前篇 長田幹彥 三〇 六
149 綠衣の聖母 後篇 長田幹彥 三〇 六
150 安城家の兄弟 前篇 里見弴 近刊
151 安城家の兄弟 中篇 里見弴 近刊
152 安城家の兄弟 後篇 里見弴 近刊
153 心驕れる女 前篇 佐藤春夫 二〇 四
154 心驕れる女 後篇 佐藤春夫 二〇 四
155 生きとし生けるもの 山本有三 二五 六
156 螢 草前篇 久米正雄 三〇 六
157 螢 草後篇 久米正雄 三〇 六
158 由利旗江 岸田國士 三五 六
159 新編乃木將軍 櫻井忠温 二〇 四
160 銃後 櫻井忠温 三〇 六
161 近世俠客げなし 子母澤寛 近刊
162 木曾路の鴉 子母澤寛 近刊
163 支那 前田河廣一郎 近刊
164 太陽のない町 德永直 近刊
165 祇園小唄1 長田幹彥 近刊
166 祇園小唄2 長田幹彥 近刊

世界名作文庫總目錄

英國篇

1 マクベス　シエークスピヤ　坪内逍遙譯　近刊
2 まちがひつゞき　シエークスピヤ　坪内逍遙譯　一〇、
3 から騒ぎ　シエークスピヤ　坪内逍遙譯　近刊
4 革命婦人　ワイルド　内田魯庵譯　近刊
5 深き淵よりの叫び　ワイルド　平田禿木譯　近刊
6 デビッドの生立ち1　ディケッンス　矢口達譯　近刊
7 デビッドの生立ち2　ディケッンス　矢口達譯　近刊
8 デビッドの生立ち3　ディケッンス　矢口達譯　近刊
9 デビッドの生立ち4　ディケッンス　矢口達譯　近刊
10 シーザーとクレオパトラ　シヨー　楠山正雄譯　一〇、
11 戀愛双曲線　前篇　ハツクスレー　永松完譯　近刊
12 戀愛双曲線　後篇　ハツクスレー　永松完譯　近刊
13 嵐が丘　前篇　ブロンテ　大和資夫譯　近刊
14 嵐が丘　後篇　ブロンテ　大和資夫譯　近刊
15 カスターブリッヂの市長　ハーディ　宮島新三郎譯　近刊

167 祇園小唄3　長田幹彦　近刊
168 祇園小唄4　長田幹彦　近刊
169 殺人狂想曲外二篇　水谷準　近刊
170 假面の輪舞外四篇　佐々木俊郎　二〇四
171 荒野の祕密　甲賀三郎　近刊
172 木賊の秋　正木不如丘　近刊

佛蘭西篇

101 「絶對」の探究 バルザック 水野亮譯 近刊
102 放蕩親爺 前篇 バルザック 永戸俊雄譯 近刊
103 放蕩親爺 後篇 バルザック 永戸俊雄譯 近刊
104 アルマンス スタンダール 前川堅市譯 近刊
105 赤と黑 1 スタンダール 桜木孝丸譯 近刊
106 赤と黑 2 スタンダール 桜木孝丸譯 近刊
107 赤と黑 3 スタンダール 桜木孝丸譯 近刊
108 赤と黑 4 スタンダール 桜木孝丸譯 近刊
109 ノートルダムの傴僂男 1 ユゴー 江間俊雄譯 近刊
110 ノートルダムの傴僂男 2 ユゴー 江間俊雄譯 近刊
111 ノートルダムの傴僂男 3 ユゴー 江間俊雄譯 近刊
112 サランボオ フロベール 生田長江譯、四〇
113 ルゴン家の人々 ゾラ 江口渙譯 近刊
114 カルメン メリメ 生田長江譯、一〇
115 吾等の心 モオパッサン 高木安雄譯、三〇
116 小間使の日記 前篇 ミルボオ 岡野馨譯 近刊
117 小間使の日記 後篇 ミルボオ 岡野馨譯 近刊
118 エス・ボナールの罪 フランス 岡野馨譯、二五
119 赤い百合 フランス 石川涼譯 近刊
120 ジャンダルク フランス 江口渙・松本譯 近刊
121 フランス短篇集 森鷗外譯 近刊
122 フィリップ短篇集 ロイ・ラッブ譯、二〇
123 葡萄畠の葡萄作り ルノアール 田邊士譯 近刊
124 ドルヴュ伯の舞踏會 ラディゲ 大澤慶譯 近刊
125 惡魔が淵 シモン 田邊利男譯 近刊
126 新譯巖窟王 前篇 デュマ 三上於菟吉譯 近刊
127 新譯巖窟王 中篇 デュマ 三上於菟吉譯 近刊
128 新譯巖窟王 後篇 デュマ 三上於菟吉譯 近刊
129 クラルテ バルビュス 佐々木孝丸譯 近刊
130 神々は渇く フランス 高木安雄譯 近刊
131 裁く人 ブウル 木村太郎譯 近刊

獨逸篇

201 ギョッツ ゲーテ 森鷗外譯 近刊
202 ヘルマンとドロテア ゲーテ 桑原吉譯、一〇
203 ウイルヘルム・テル シラー 桑原吉譯 近刊
204 ツアラトストラ 前篇 ニイチエ 生田長江譯、二五
205 ツアラトストラ 後篇 ニイチエ 生田長江譯 近刊
206 盲目のゼロニモとその兄 外五篇 シュニッツラー 山本有三譯、一五
207 戀愛三昧 外三篇 シュニッツラー 森鷗外譯、二〇
208 消えぬ過去 前篇 ズーデルマン 生田長江譯、四〇
209 消えぬ過去 後篇 ズーデルマン 生田長江譯 近刊
210 寂しき人々 ハウプトマン 森鷗外譯 近刊
211 沈鐘 ハウプトマン 楠山正雄譯、一五
212 獨逸短篇集 森鷗外譯 近刊
213 街の子 外一篇 シュニッツラー 森鷗外譯 近刊
214 クライスト短篇集 クライスト 相良守峰譯 近刊

215 若きヴェルテルの悲しみ　ゲーテ作　片山敏彦譯　近刊

露西亞篇

301 復活上　トルストイ作　内田魯庵譯　近刊
302 復活下　内田魯庵譯　近刊
303 虛げられし人々　ドストエフスキー作　昇曙夢譯　近刊
304 虛げられし人々　ドストエフスキー作　昇曙夢譯　近刊
305 貴族の家　ツルゲネフ作　熊澤復六譯　近刊
306 檢察官　ゴーゴリ作　熊澤復六譯　一、五
307 決鬪　チエホフ作　小山内薫譯　二〇
308 鴎・叔父ワーニヤ　チエホフ作　中村白葉譯　近刊
309 三人姉妹・櫻の園　チエホフ作　中村白葉譯　近刊
310 どん底　ゴーリキイ作　小山内薫譯　一、五
311 零落者の群　ゴーリキイ作　昇曙夢譯　一、五
312 私の大學　ゴーリキイ作　藤原惟人譯　近刊
313 母　前篇　ゴーリキイ作　長谷川義夫譯　近刊
314 母　後篇　ゴーリキイ作　長谷川義夫譯　近刊

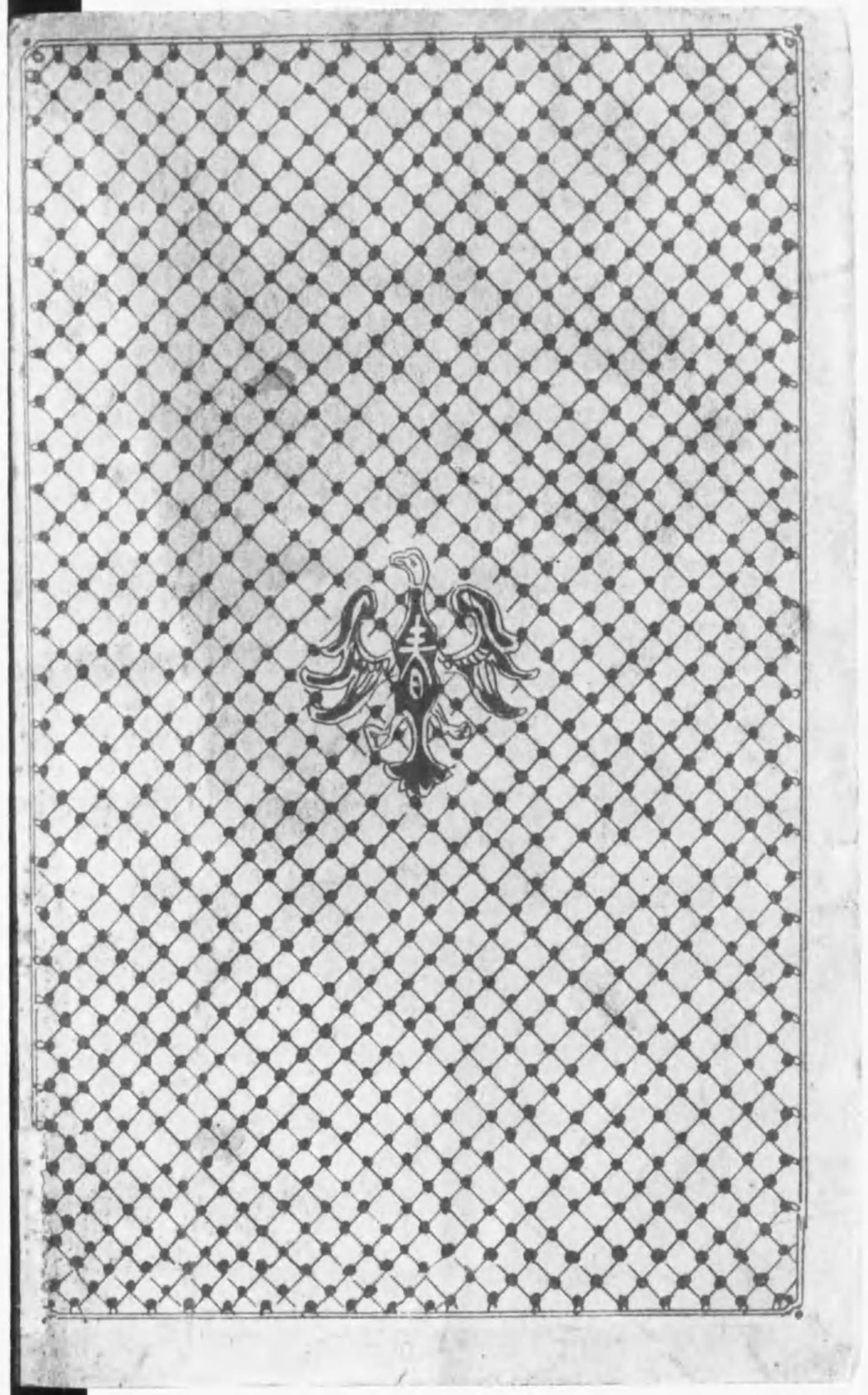
315 革命家の思出　前篇　クロポトキン作　大杉榮譯　一、二五
316 革命家の思出　後篇　クロポトキン作　大杉榮譯　一、三〇
317 露西亞短篇集 1　露國外國家作　森鷗外譯　近刊
318 露西亞短篇集 2　露國外國家作　森鷗外譯　近刊
319 北極の記錄　ピリニヤーク作　米川正夫譯　一、二〇
320 消されない月の話　ピリニヤーク作　米川正夫譯　一、二五
321 その前夜　ツルゲネフ作　米川正夫譯　近刊

諸國篇

401 病院橫丁の殺人犯　外二篇　ポー作　森鷗外譯　一、一〇
402 ノラ　イプセン作　森鷗外譯　近刊
403 幽靈　イプセン作　森鷗外譯　一、一五
404 ジョン・ガブリエル・ボルクマン　イプセン作　森鷗外譯　近刊
405 債鬼　外四篇　ストリンドベルグ作　森鷗外譯　近刊
406 死の勝利　ダヌンチオ作　生田長江譯　一、四〇
407 二人畫工　外一篇　シエンキウイツ作　内田魯庵譯　近刊
408 ウヤンゲル　前篇　シンクレア作　前田河廣一郎譯　一、二五
409 ウヤンゲル　前篇　シンクレア作　前田河廣一郎譯　一、二五
410 スパイ　前篇　シンクレア作　早坂二郎譯　一、二五
411 スパイ　後篇　シンクレア作　早坂二郎譯　一、二五
412 血と砂　前篇　イバニエス作　永田寛定譯　近刊
413 血と砂　後篇　イバニエス作　永田寛定譯　近刊

春陽堂文庫既刊書目

1. 濫口入道　高山樗牛　一四五
2. 虞美人草　夏目漱石　四〇
3. 坊ちやん　夏目漱石　二五
4. 土　長塚節　三五
5. 草枕　夏目漱石　二五
6. 三四郎　夏目漱石　三〇
7. 倫敦塔・その他　夏目漱石　二〇
8. 村井長庵　河竹默阿彌　二五
9. 三人吉三　河竹默阿彌　二五
10. 河内山と直侍　河竹默阿彌　三五
11. 相互扶助論　クロポトキン　大杉榮　三〇
12. それから　夏目漱石　三〇
13. 新生第一卷　島崎藤村　三〇
14. 新生第二卷　島崎藤村　三〇
15. 藤村詩集　島崎藤村　五〇
16. 金色夜叉　尾崎紅葉　五八〇
17. 照葉狂言　泉鏡花　一四五
18. 門　夏目漱石　三五
19. 邪宗門　芥川龍之介　一二〇
20. 長塚節歌集　長塚節　六八〇
21. 滿韓ところ〴〵　夏目漱石　一四五
22. 朝鮮　高濱虛子　三〇
23. 彼岸過迄　夏目漱石　三五
24. にごりえ　樋口一葉　二四〇
25. 片戀・外六篇　二葉亭四迷　三〇
26. 硝子戸の中　夏目漱石　二〇
27. 嵐・分配　島崎藤村　二〇
28. 三人妻　尾崎紅葉　二五
29. 春服　芥川龍之介　二五
30. 卍（まんじ）　谷崎潤一郎　二四〇
31. 多情多恨　尾崎紅葉　三五
32. 松蘿玉液　正岡子規　一〇
33. 近代の小說　田山花袋　三〇
34. 史劇論　坪内逍遙　二四〇
35. 五重塔外二篇　幸田露伴　二四〇
36. 蓼喰ふ蟲　谷崎潤一郎　三四〇
37. 田舍敎師　田山花袋　三〇
38. あらくれ　德田秋聲　三五
39. 泥人形外二篇　正宗白鳥　三五
40. 異人邦　（ピエトランゼエー）　島崎藤村　三〇
41. 刺青外六篇　谷崎潤一郎　三四〇
42. 春泥　久保田万太郎　二四五
43. 柿二つ　高濱虛子　三五
44. 桐一葉　大いに笑ふ淀君　坪内逍遙　三四〇
45. 沓手鳥孤城落月　坪内逍遙　二〇
46. 田園の憂鬱　佐藤春夫　三五
47. 二人女・心の闇　尾崎紅葉　二四五
48. 北條霞亭　森鷗外　四〇
49. 源義朝　田山花袋　三六五
50. 即興詩人　森鷗外　四六〇
51. アメリカ物語　永井荷風　近刊
52. フランス物語　永井荷風　近刊
53. 不言不語　尾崎紅葉　一〇
54. 多情佛心　前篇　里見弴　近刊
55. 多情佛心　後篇　里見弴　近刊
56. 水沫集　上卷　森鷗外　三五
57. 水沫集　下卷　森鷗外　三五
58. 捨てられる迄　谷崎潤郎　近刊
59. おかめ笹　永井荷風　近刊
60. 珊瑚集・附日和下駄　永井荷風　近刊
61. 其面影　二葉亭四迷　近刊
62. 牧の方　坪内逍遙　近刊
63. 名殘の星月夜　坪内逍遙　近刊
64. 義時の最期　坪内逍遙　近刊
65. 西遊日誌抄　新歸朝者日記　永井荷風　近刊
66. 饒太郎　谷崎潤一郎　二四五
67. 太陽は草の香する　薄田泣菫　近刊

68 チロルの秋　岸田國士　近刊
69 影燈籠　芥川龍之介　近刊
70 小說神髓　坪內逍遙　近刊
71 思ひ出す人々　內田魯庵　近刊
77 伽羅枕　尾崎紅葉　近刊
79 犀星隨筆　室生犀星　近刊

終